坂口語

二〇××年三月、オープン戦が終わり、プロ野球が開幕しようとしていた。しかしこの物語の主人公、坂口は無事開幕一軍が決定したにもかかわらず、ロッカールームで一人苦悶の表情を浮かべていた。

俊足巧打、守備も肩も一流の坂口であるが、とある大きな悩みを抱えていた。顔が恐いと子供のファンに言われたりと小さな悩みはいくつもあったが、今彼が抱えてる悩みは、盗塁が苦手、ということだ。

盗塁とは必ずしも足が早い者が上手いというわけではない。相手投手のフォームや心理を観察したり、タイミングや思い切りのよさなど、成功させるのは非常に難しい。しかしリスクは大きい分メリットも大きい。成功すればひとつもアウトを消費することなく、次の塁を狙えるのだから。

だからこそ先頭バッターを打つ坂口が盗塁を決めれば、一気にチャンス拡大、ファンやチーム関係者からの信頼もアップ、給料アップウハウハとなる。

坂口が悶々と考えていると、ＯＰ戦絶好調男、彼のチームメイトの大引がシャワーを浴びた後であろうか、パンツ一丁でロッカールームに入ってきた。大引らしくないだらしない姿だ。

「どうしたグッチ？　またファンのちびっ子に顔が恐いと言われたのか？」

大引の軽口に坂口の頬に血が上がった。

「ビッキーよ、俺は真面目に悩んでいるんだよ。盗塁が上手くなりたいんだよ！　何かいい案はないか？」

「それならうちの神社に来いよ。三万ぐらい賽銭してくれたら盗塁王は硬いぜ」

大引がそう声をかけると、坂口はじろりと一瞥をくれた。

「失言ですゴメンナサイ」

坂口を大引はいきなり拝んだ。

「そ、それならいい情報があるぞ。開幕までまだちょっと時間があるだろ、一回俺の神社に来いよ。いやいやそんな顔するなよ、実際うちの神社でお参りしたチビッコが野球が上手くなったって親父から聞いてるんだ！」

坂口は坂口を殴ろうとしていた手を引っ込めて、軽く舌打ちをした。

「神頼みかよ、お前は神社の息子だからそうかもしれないが俺は信じられんぞ。」

「まぁまぁ一回だまされたと思って来いよ。せんべいでも出すしさ。」

「……わかったわかった。たしかに暇あるしそのうち一回行くよ。」

坂口は大引の言うことはもちろん神頼みな行為も信用していないが、開幕まで時間がある

のは確かなので、大引の実家の神社に行くことを決めた。
「あー、あとうち来る時は雨の日にしてくれよな。」
ロッカールームから出ようとした坂口の背中に向かって大引が声をかけた。
「雨の日？ なんで雨の日なんだ？」
「ん、まぁそれもおまじないの一種だ。」
「雨か、そういえば明後日が雨だったな。その日にでも行くか。さて、もう晩飯時だ、俺は先に帰らせてもらうぜ。」
坂口は大引との会話を切り上げ、ロッカールームを後にした。後ろで大引が賽銭忘れんなよと声をかけてきたがそれを無視して悩める男坂口は岐路についた。

神社の話を聞いた二日後、雨の中坂口は神社に来ていた。ちなみに賽銭は自分の背番号の九円分を持ってきた。このことから少しは縁を担いでいるのが伺える。坂口、プレーも元担ぎも全力である。
しかし坂口が神社に着いてから大引に何度も電話しているが一向に出ない。憮然と立ち尽くす坂口であったが、そのとき坂口の携帯が境内に鳴り響いた。メールだった。急用ができて会うことができないという内容であった。めずらしく絵文字が多くてなんとなくむかついた坂口であったが、軽くスルーして、仕方なく一人で参拝することにした。
神社には、悪天候もあってか坂口以外は誰もいなく、何か不気味な感じがした。

そのとき、「何か」が坂口の肩に触れた。坂口は驚き、坂口は今年一番の反射神経でその「何か」と距離をとり、相手を黙視した。それは全身が真っ黒な燕尾服で覆われた男だった。しかし、そんな外見の格好は坂口に関係なかった。坂口はその男の顔を見てその場から、動くことも声を発することもできなかった。その男は坂口のよく知っている男であり、もうこの世にいるはずのない人物であった。
「……大瀬、浩之お前は、なぜ！ どうしてここにいる！」
坂口は混乱、戸惑い、恐怖…様々な感情が入り乱れ心の抑制ができずにいた。それもそのはず、大瀬浩之は坂口と大引と仲がよく、昨年は一番坂口二番大引三番大瀬の仲良しトリオでチームを引っ張り、首位争いをするほどチーム状態がよかった。しかし、大瀬は昨年の秋自宅の火事で命を落とした。原因は分からないが、大瀬も大瀬の奥さんの遺体が発見できなかったぐらい火が強かったらしい。チームは深い悲しみに包まれた。チーム全体の士気は最後まであがることは泣く、優勝はもちろんクライマックスステージにも進出できなかった。

「よかった。まだ僕のこと、覚えててくれてるみたいだね。」
大瀬は一歩坂口に近寄る。
「盗塁が上手くなりたいだろう？」
また一歩大瀬の歩は坂口に近づく。坂口はまだ何もしゃべれずにいた。
「あっ、びっくりしちゃった？　だよね、説明してあげるよ。僕はそうだねぇ…ぶっちゃけると吸血鬼さ。実はあの火事で僕は死んではいなかったのさ。いや死んだとは思ったよ。でも気がついたら僕はどこかのベットに寝ていた。となりで嫁が泣いていた。実は僕の嫁は吸血鬼だったんだ。吸血鬼は火に弱いという伝説もあるけどあの程度の炎じゃ死なない、でも人間である僕には耐えられない。火傷で生死を彷徨った僕に嫁は吸血鬼である自分の血を僕に飲ませた。そうして急造だけど僕も吸血鬼になった。いや完全にはなってなかったけど、火傷を耐えるのは簡単だった。嫁は泣いていたけど僕は怒るどころか感謝したよ。まだ死にたくなかったし、自分の秘密をばらして、僕を吸血鬼にしてまで死なせたくなかったという愛に僕は心打たれたよ。いい話でしょ？」
雨が強くなってきた。頭が冷えてきた。坂口はおそるおそる口を開いた。
「大瀬、お前は何を望んでいるんだ？」
「…吸血鬼となった僕は人の血を吸うことで血を吸った人間と同じ姿に変身できるんだ。はじめは出来心だった。草野球チームの人の体を使ってプレーしてみたんだ。そしたら僕の身体能力が上がってるんだよ。まぁ人間じゃないしね、死して野球に触れて、未練がますます強くなってしまったんだよ。」
坂口と大瀬の距離は一ｍを切った。
「グッチ、君の体を貸してくれないか？　毎日じゃないんだよ？　僕は完全じゃないから結構光を浴びても大丈夫なんだ。親友の君なら貸してくれるよねぇ？」
突然の非日常を押し付けられた坂口の混乱はまだ続いていた。それでもこの状況がどれだけおかしいかは分かっているつもりだった。
「理解できないし、納得もできない。間違ってる。お前は死んだんだ！」
坂口はしどろもどろに、諭すように話しかけた。がこれは大瀬には逆効果だった。
「君もビッキーと同じことを言うんだね…。」
ビッキーという久々に聞いた単語に徐々に坂口は冷静さを取り戻していった。
「まさか、お前！」
「あぁ、僕は最初ビッキーに頼んだんだ。だけどあいつは断った。だから血を吸った。」
「ちょっと待てよ！　それはいつだ！」
坂口はここ最近の大引の様子が少しおかしいと思っていた。その原因が今繋がった。糸が切れたように大瀬に詰め寄り真相を問いただそうとした。
「落ち着きなよ。今から説明してあげるから。んーとね、ビッキーと接触したのはＯＰ戦の始まる数日前。グッチみたいに説教じみたことといってきたから脅して血を吸って入れ替わってもらったんだ。入れ替わるのは野球の試合がある時だけだけどね。」

大瀬は坂口が何も返してこないことを確認してから話を続けた。
「ビッキーは何度も抗議に来たよ。しつこいからチャンスをあげたんだ。…グッチをここに連れて来てくれたらもうビッキーの前に現れないし、変身もしないと約束したんだ。それでビッキーは実行した。」
坂口は何もできない。しゃべれない。大瀬が迫る。
「もういいでしょ？ グッチ。あとビッキーのことを恨まないであげてね。誰だって自分は一番大事なんだから。」
そして大瀬は坂口の首筋に噛み付いた。
「…ほんとは分かってるんだ。こんなこと間違ってるって。でもグッチ、こんなことしてでも僕は野球がしたいんだ。野球が、大好きなんだ！ 僕には野球しかなかったんだ…。辛いけど、一年だけ…、グッチ。ごめん。」
坂口は気を失った。後半の大瀬の言葉は届いていない。大瀬は顔を隠し、しばらくうつむいていたが、すぐに感情を消し去りその場から消えた。

そしてプロ野球は開幕した。一番センターで出場し続けた坂口は、キャリアハイの成績を残し、日本シリーズには出られなかったものの、見事チームをリーグ優勝へと導いた。
シーズンが終わったその日の夜。坂口は大瀬に呼び出された。そこで大瀬は「グッチと吸血鬼大瀬との記憶を消して、改竄する…。」とだけ言ってすぐに消えてしまった。消える直前、ありがとう。とかすかに聞こえた気がした。
余談であるが、大引も記憶を消されたため、坂口と大引の親友の関係は今も続いている。その後の坂口の成績だが、記憶を消され、自分自身がキャリアハイの活躍をしたように記憶を改竄させられたが、実際は約一年試合間隔がなかったため、翌年は大スランプに陥る。しかしポテンシャルの高さを活かして翌年からはまた安定した成績を残した。
大瀬は今どこで何をしているであろうか。ひっそりと嫁と暮らしているのか。はたまた誰かの体を乗っ取り野球を続けているのか。それは誰にも分からない。